

【 第140 聖詠 第7調 】



しゅよなんぢによぶすみやかにわれにいたりた給  
主 爾 呼 速 我 格 た 給  
まえ、しゅよわれにききたまえ、  
主 我 聴 た 給  
しゅよなんぢによぶすみやかにわれにいたりた給  
主 爾 呼 速 我 格 た 給  
まえ、なんぢによぶときわがいのりのこ  
えをいれたまえ、主よわれにききたまえ、  
納 給  
え、ねがわくはわがいのりはこうろ  
の 香 かおりのごとく、なんぢがかんばせのまえ  
にのぼり、わがてをあぐるはくれのまつ  
祭りのごとくいれられん。しゅよわれにききた  
給、主 我 聴 た 給  
まえ。

誦經) しゅ わ くち まもり お わ くちびる もん ふせ たま わ こころ よこしま ことば  
主よ、我が口に衛を置き、我が唇の門を扞ぎ給え、我が心に邪なる言

かたが ぶほう おこな ひと とも つみ いいわけ なか ねが われ かれら  
に傾きて、不法を行う人と共に、罪の推諉せしむる母れ、願わくは我は彼等の

あまみ な ぎじん われ ばつ こ きょうじゆつ われ せ こ い  
甘味を嘗めざらん。義人は我を罰すべし、是れ矜恤なり、我を譴むべし、是れ極と

うるわ あぶら わ こうべ なや あた もの ただわ いのり かれら あくじ てき  
美しき膏、我が首を悩ます能わざる者なり、唯我が禱は彼等の悪事に敵す。

かれら しゅちょう いわお あいだ さん わ ことば にゆうわ き われら つち ごと き  
彼等の首長は巖石の間に散じ、我が言の柔和なるを聴く。我等を土の如く斫り

くだ わ ほね ちごく くち ち お しゅ しゅ ただわ め なんぢ あお われなんぢ  
砕き、我が骨は地獄の口に散りて落つ。主よ、主よ、唯我が目は爾を仰ぎ、我爾

たの わ たましい しりぞ なか わ ため もう わな ふほうしゃ あみ われ まも  
を恃む、我が靈を退くる母れ。我が爲に設けられし罟、不法者の網より我を護

たま ふけんしゃ おのれ あみ かか ただわれ す え  
り給え。不虔者は己の網に罹り、唯我は過ぐるを得ん。

### 【 第 1 4 1 聖詠 】

わ こえ もつ しゅ よ わ こえ もつ しゅ いの わ いのり そのまえ そそ わ うれい  
我が聲を以て主に呼び、我が聲を以て主に禱り、我が禱を其前に注ぎ、我が憂

そのまえ あらわ わ たましい うち よわ とき なんぢ われ みち し わ ゆ みち  
を其前に顯せり。我が靈の表に弱りし時、爾は私の途を知れり、我が行く路

おい かれら ひそか わ ため あみ もう われみぎ め そそ ひとり われ みと  
に於て、彼等は竊に我が爲に網を設けたり。我右に目を注ぐに、一人も我を認む

もの われ のが ところ わ たましい かえりみ もの しゅ われなんぢ よ  
る者なし、我に遁るる所なく、我が靈を顧る者なし。主よ、我爾に呼びて

い なんぢ われ かくれが い もの ち おい われ ぶん わ よ き たま  
云えり、爾は私の避所なり、生ける者の地に於いて私の分なり。我が呼ぶを聴き給

われはなはだよわ われ はくがい もの すく たま かれら われ つよ  
え、我甚弱りたればなり、我を迫害する者より救い給え、彼等は我より強けれ

ばなり。

⑥ しゅ も なんぢふほう ただ しゅ だれ よ た しか なんぢ ゆるし ひと  
主よ、若し爾不法を糺さば、主よ、孰か能く立たん。然れども爾に赦あり、人

なんぢ まえ つつし ため  
の爾の前に敬まん爲なり。

しゅ われほうとう もの ごと なんぢ おんちよう はな じんじ とみ ついや じれん しゅ  
主よ、我放蕩の者の如く爾の恩寵に離れて、仁慈の富を費せり。慈憐なる主

なんぢ はし つ なんぢ よ かみ われつみ おか われ あわれ たま  
よ、爾に趨り附きて爾に呼ぶ、神よ、我罪を犯せり、我を憐み給え。

⑤ われしゅ のぞ わ たましいしゅ のぞ われかれ ことば たの  
我主を望み、我が靈主を望み、我彼の言を恃む。

しゅ われほうとう もの ごと なんぢ おんちよう はな じんじ とみ ついや じれん しゅ  
主よ、我放蕩の者の如く爾の恩寵に離れて、仁慈の富を費せり。慈憐なる主

なんぢ はし つ なんぢ よ かみ われつみ おか われ あわれ たま  
よ、爾に趨り附きて爾に呼ぶ、神よ、我罪を犯せり、我を憐み給え。

④ わ たましいしゅ ま ばんにん あさ ま ばんにん あさ ま はなはだ  
我が靈主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。

じゅなんしゃ なんぢら おのれ ち ながれ もつ はなはだ ふけん ほのお け せかい しゅう  
受難者よ、爾等は己の血の流を以て甚しき不虔の焰を滅して、世界に衆

ため けいけん こうみょう てら なんぢら きよめい しょしん そのあくしゅう まつり みや  
の爲に敬虔の光明を照せり。爾等は虚名なる諸神と、其惡臭の祭祀と、宮と

ことごと や ち あ もの ため いときよ ひかり かがや われらこれ てら む  
を盡く焚きて、地に在る者の爲に最潔き光を輝かせり。我等之に照されて、無

しん やみ のが ぐうぞう まよい さ せかい おおい あわれみ たま ふくはい  
神の暗を脱れ、偶像の迷を避けて、世界に大なる憐を賜うハリストスに伏拜

す。

ねが しゅ たの けだしあわれみ しゅ おおい あがない かれ  
③願わくはイスライリは主を恃まん、蓋 憐は主にあり、大なる贖も彼にあり、

かれ そのことごと ふほう あがな  
彼はイスライリを其 悉くの不法より贖わん。

しゅ なんぢ しょせいじん しん たて ぐそく じゅうじか しるし おのれ かた いさ  
主よ、爾の諸聖人は信の盾を具足し、十字架の記號にて己を堅め、勇ましく

おのれ くるしみ わた あくま おごり いざない むな かれら きとう よ ぜんのう  
己を苦に付して、惡魔の驕慢と誘惑とを空しくせり。彼等の祈禱に由りて、全能

かみ せかい へいあん われら たましい おおい あわれみ くだ たま  
の神として、世界に平安、我等の靈に大なる憐を降し給え。

ばんみん しゅ ほ あ ばんぞく かれ あが ほ  
②萬民よ、主を讃め揚げよ、萬族よ、彼を崇め讃めよ、

しゅ なんぢ しょせいじん しん たて ぐそく じゅうじか しるし おのれ かた いさ  
主よ、爾の諸聖人は信の盾を具足し、十字架の記號にて己を堅め、勇ましく

おのれ くるしみ わた あくま おごり いざない むな かれら きとう よ ぜんのう  
己を苦に付して、惡魔の驕慢と誘惑とを空しくせり。彼等の祈禱に由りて、全能

かみ せかい へいあん われら たましい おおい あわれみ くだ たま  
の神として、世界に平安、我等の靈に大なる憐を降し給え。

けだしかれ われら ほどこ あわれみ おおい しゅ しんじつ なが そんな  
①蓋彼が我等に施す憐は大なり、主の眞實は永く存す。

いた さんび ちめいしゃ なんぢら およそ ちじょう こと い いさ おのれ  
至りて讚美たる致命者よ、爾等は凡の地上の事を意とせずして、勇ましく己

くるしみ わた のぞ ふく え てん くに つ もの な じんあい かみ まえ いさみ  
を苦に付し、望みし福を得て、天の國を嗣ぐ者と爲れり。仁愛なる神の前に勇敢

たも せかい ため へいあん われら たましい ため おおい あわれみ もと たま  
を有ちて、世界の爲に平安、我等の靈の爲に大なる憐を求め給え。

【 生神女讚詞 第5調 】

こうえいはちちとことせいしんにきす、いま  
光榮父子聖神歸今  
もいつもよよに、アミン。  
何時もよ世に、アミン。

むか しくれないのうみにて こんいんをしら  
 昔 紅 海 婚姻 知

ざるよめのかたちしるされたり。かしこ  
 聘女 象 記 彼 處

にはモイセイみづをわか つもの、ここには  
 水 分 者 此 處

ガヴリルきせきにつとむるものなり。かの  
 奇 迹 務 者 彼

とときイスライリはあしをぬらさずしてふかみをあ歩  
 時 足 濡 深 處 歩

ゆみ、いまどうていぢよはたねなくして  
 今 童 貞 女 種

ハリストスをうめり。うみはイスライリのわた  
 生 海 渉

りしのちもとのままとおられず、きずな  
 後 元 過 瑕

きものはエムヌイルをうみしのちもとのままきず  
 者 生 後 元 瑕

なし。えいえんにしていとえいえんなるも者  
 永 遠 最 永 遠 者

のひととなりてあらわれしかみよ、わ  
 人 現 神 我

れらをあわれみたまえ。  
 等 憐 給

【 聖入 】

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、<sup>つつし</sup> 肅 <sup>た</sup> みて立て、

【 聖ソフロニイの祝文 】

せいにしてふくたるじょうせいなるてんのちちの  
 聖 福 常 生 天 父  
 せいなるこうえいのおだやかなるひかりイイ  
 聖 光 榮 穩 光  
 ススハリストスよ、われらひのいりにいたりく  
 我 等 日 入 至 暮  
 れのひかりをみて、かみちちとことせいしん  
 光 見 神 父 子 聖 神  
 をうと う。いのちをたもうかみのこ  
 歌 生 命 賜 神 子  
 よ、なんちはいつもけいけんのこえにてうたわ  
 爾 何 時 敬 虔 聲 歌  
 るべし、ゆえにせかいはなんちをあげめ  
 故 世 界 爾 崇  
 ほむ。

【 第一の提綱 <sup>プロキメン</sup> 】

司祭) <sup>つつし</sup> 謹 <sup>き</sup> みて聴くべし、<sup>しゅうじん</sup> 衆 <sup>へいあん</sup> 人に平安、<sup>えいち</sup> 睿智、<sup>つつし</sup> 謹 <sup>き</sup> みて聴くべし。

誦經) <sup>だいし</sup> プロキメン、<sup>しらべ</sup> 第四の <sup>いの</sup> 調、<sup>せまき</sup> 祈る、<sup>おい</sup> 狭難に於て<sup>われら</sup> 我等に<sup>たすけ</sup> 助を<sup>あた</sup> 昇え<sup>たま</sup> 給え、<sup>ひと</sup> 人の<sup>まもり</sup> 護佑は<sup>むな</sup> 虚

しければなり、

いのる、せまきにおいてわれらにたすけをあ  
 祈 狭難 於 我 等 助 昇  
 たえたまえ、ひとのまもりはむなしけれ  
 給 人 護 佑 虚  
 ば な り 。

誦經) <sup>かみ</sup>神よ、<sup>なんぢわれら</sup>爾我等を棄て、<sup>す</sup>、<sup>なんぢわれら</sup>爾我等を敗れり、<sup>やぶ</sup>

いのる、せまきにおいてわれらにたすけをあ  
 祈 狭難 於 我 等 助 昇  
 たえたまえ、ひとのまもりはむなしけれ  
 給 人 護 佑 虚  
 ば な り 。

誦經) <sup>いの</sup>祈る、<sup>せまき</sup>狭難に於て<sup>おい</sup>われら<sup>たすけ</sup>我等に<sup>あた</sup>助<sup>たま</sup>を昇え給え、

ひとのまもりはむなしければなり。  
 人 護 佑 虚

司祭) <sup>えいち</sup>睿智、

誦經) <sup>そうせいき</sup>創世記の讀、<sup>よみ</sup>

司祭) <sup>つつし</sup>謹<sup>き</sup>みて聽くべし、

【 創世記 8章4～21節 】

誦經) <sup>はこぶね</sup>方舟は<sup>しちがつ</sup>七月に至り、<sup>いた</sup>其月の<sup>そのつき</sup>十七日に<sup>じゅうしちにち</sup>アララト山に<sup>ざん</sup>止まれり。<sup>とど</sup>水<sup>みづ</sup>漸く<sup>ようや</sup>減じ

<sup>じゅうがつ</sup>て十月に至り、<sup>いた</sup>十月の<sup>じゅうがつ</sup>朔に<sup>ついたち</sup>山の<sup>やま</sup>峯<sup>みね</sup>現れたり。<sup>しじゅうにち</sup>四十日を<sup>へ</sup>歴て<sup>のち</sup>後、<sup>その</sup>ノイ其

<sup>はこぶね</sup>方舟に<sup>つく</sup>作りたる<sup>まど</sup>窓を<sup>ひら</sup>啓きて、<sup>からす</sup>鴉を<sup>はな</sup>放ちたれば、<sup>みづ</sup>水の<sup>ち</sup>地に<sup>か</sup>涸るるに<sup>いた</sup>至るまで、<sup>かけ</sup>翩り

おうらい そののちかれ ち おもて みづ しりぞ み ため はと はな はと  
て往來せり。其後彼は地の面より水の退きしかを見ん爲に、鴿を放ちしに、鴿

そのあし とど ところ え かれ はこぶね かえ みづぜんち おもて あ  
は其足を止むる所を得ずして、彼に方舟に還れり、水全地の面に在りたればな

かれて の これ と はこぶね おのれ ところ い またなぬか ま ふたたびはと  
り、彼手を伸べて之を取り、方舟に己の所に入れたり。又七日を待ちて、再鴿

はこぶね はな はとくれ およ そのくち かんらん わかば ふく かれ かえ ここ  
を方舟より放ちしに、鴿暮に及びて、其口に橄欖の新葉を銜みて彼に還れり、是

おい みづ ち おもて しりぞ し さらに またなぬか ま はと はな  
に於てノイ水の地の面より退きしを知れり。更に又七日を待ちて、鴿を放ちし

またかれ ところ かえ ざいせい ろくひやくいちねん いちがつ がんじつ みづち か  
に、復彼の所に還らざりき。ノイ在世の六百一年の一月の元日に水地に涸れ

つく ところ はこぶね おおい ひら みづ ち おもて か み に  
たり、ノイ作りし所の方舟の蓋を啓きて、水の地の面に涸れたるを視たり。二

がつ にじゅうしちにち いた ちかわ しゅかみ い い なんちおよ なんち  
月の二十七日に至りて地乾きたり。主神はノイに謂いて曰えり、爾及び爾の

つま なんち しょしおよ なんち しょし つま とも はこぶね い なんち とも あ およそ  
妻、爾の諸子及び爾の諸子の妻、共に方舟より出づべし、爾と偕に在る凡

けもの およ およそ にく とり かちく いた およ およそ ち は もの おのれ とも  
の獸、及び凡の肉、鳥より家畜に至るまで、及び凡の地に匍う者を己と偕に

ひ いた これら ち さん ち うえ う かつふ ここ おい およ そのつま  
引き出せ、此等は地に散じて、地の上に生み且殖ゆべし。是に於てノイ及び其妻、

そのしょし そのしょし つま とも い およそ けもの およそ かちく およそ とり およそ ち  
其諸子、其諸子の妻、共に出でたり、凡の獸、凡の家畜、凡の鳥、凡の地

は もの そのるい したが はこぶね い しゅ ため さいだん きづ およそ  
に匍う者、其類に従いて方舟より出でたり。ノイは主の爲に祭壇を築き、凡の

きよ かちくおよ およそ きよ とり と はんさい だん うえ ささ しゅ そのこうば  
潔き家畜及び凡の潔き鳥より取りて、燔祭を壇の上に獻げたり、主は其馨し

かおり う  
き香を享けたり。

【 第二の提綱 】

司祭) つつし き  
謹みて聽くべし、

誦經) だいろく しらべ かみ わ よ き わ いのり き い たま  
プロキメン、第六の調、神よ、我が籲ぶを聞き、我が祈を聞き納れ給え、

か み よ 、 わ が よ ぶ を き き 、 わ が い の り を  
神 我 籲 聽 我 祈  
き き い れ た ま え 。  
聽 納 給

誦經) われち はて なんぢ よ  
我地の極より爾に呼ぶ、

か み よ、 わ が よ ぶ を き き、 わ が い の り を  
神 我 籲 聽 我 祈  
き き い れ た ま え。  
聽 納 給

誦經) かみ わ よ き  
神よ、我が籲ぶを聞き、

わ が い の り を き き い れ た ま え。  
我 祈 聽 納 給

【 祝福 】

司祭) えいち つつし た ひかり しゅうじん たら  
睿智、肅みて立て、ハリストスの光は衆人を照らす。

誦經) しんげん よみ  
箴言の讀、

司祭) つつし き  
謹みて聽くべし、

【 箴言 10章31節～11章12節 】

誦經) ぎしゃ くち ちえ なが あくしゃ した た ぎしゃ くちびる よろこ し  
義者の口は智慧を流し悪者の舌は斷たれん。義者の唇は悦ぶべきことを知り、

あくしゃ くち もと かた いつわり はかり しゅ にく ところ ただ めかた そのよろこ  
悪者の口は戻れることを語る。詐偽の權衡は主の惡む所、正しき重量は其悦ぶ

ところ たかぶりきた はち またきた へりくだ もの とも ちえ ぎしゃ し いたみ  
所なり。驕傲來れば耻辱も亦來る、謙る者と偕に智慧あり。義者は死して痛惜

のこ あくしゃ ほろび にわか よろこび いた なおきもの ただしき かれら みちび もとれる  
を遺し、悪者の滅は俄にして喜悦を致す。正直者の端莊は彼等を導き、悖逆

もの よこしま かれら ほろぼ たから いかり ひ えき ただぎ し すく  
者の邪曲は彼等を滅さん。貨財は震怒の日に益なし、惟義は死より救わん。

きずなきもの ぎ そのみち たいらか あくしゃ そのあく よ たお なおきもの ぎ かれら  
無玷者の義は其途を坦にし、悪者は其惡に因りて跌れん。正直者の義は彼等を

すく ふほう もの そのふほう よ とら ぎじん し のちそのぞみた ふほう  
救い、不法の者は其不法に因りて執えられん。義人は死して後其望絶えず、不法

もの のぞみ ほろ ぎしゃ かんなん すく あくしゃ かわ これ おちい ふたごころ もの  
の者の望は亡ぶ。義者は艱難より救われ、悪者は代りて之に陥る。貳心の者

くち もつ そのとなり なく ただぎしゃ ちしき よ すく ぎしゃこうふく う とき まち  
は口を以て其鄰を亡し、惟義者は知識に因りて救わる。義者幸福を獲る時は邑



たの あくしゃほろ とき よろこび ぎしゃ しゆくふく よ まち たか あくしゃ  
楽しみ、悪者亡ぶる時は 歡 あり。義者の 祝 福に因りて邑は高くせられ、悪者

くち よ くづ ちえ もの そのとなり あなど ちえ ひと もだし まも  
の口に因りて圯さる。智慧なき者は其 鄰 を 侮 り、智慧ある人は緘黙を守る。

※ 願わくは我が禱は、、、へ